

御雇外国人 Benjamin Smith Lyman の言語研究

ティモシー・バンス

ただいまご紹介いただきました国立国語研究所のバンスでございます。では、早速始めさせていただきますと思います。

連濁とは？

- ▶ 形態音素的現象（音韻交替）
- ▶ 形態素 (morpheme)
意味を持つ最小の言語単位

3

連濁とは、日本語で一番よく知られている形態音素的現象です。いわゆる音韻交替の一種です。

1つの具体例として、‘鳥’ という意味の形態素が挙げられます。

鳥	ˈtori ‘bird’	
鳥籠	ˈtori+kago ‘birdcage’	
蜂鳥	hachi+ˈdori ‘hummingbird’	▶ 連濁の一例

4

tori や tori+kago のような単語では、無声阻害音の t で始まる tori が現われますが、hachi+dori では有声阻害音の d で始まる dori が現われます。

この hachi+dori の d が連濁の一例です。

- ▶ 無声阻害音 (voiceless obstruent)
清音の子音
ヘボン式ローマ字: f h t k ts s ch sh
- ▶ 有声阻害音 (voiced obstruent)
濁音の子音
ヘボン式ローマ字: b d g z j

5

無声阻害音とは、清音の子音です。ヘボン式ローマ字の場合は、これらの文字に当たるものです。

有声阻害音とは、濁音の子音で、ヘボン式ローマ字のこの5つの文字に当たるものです。

▶ 異形態 (allomorph)
清環境に応じて異なった形で現れた、ある形態素の一形態

6

鳥 tori
↑
鳥籠 tori+kago
↑
蜂鳥 hachi+dori
↑



7

形態素が tori~dori のように音韻交替を示す場合は、有声阻害音で始まる異形態は語頭には現われません。

tori~dori の場合には、dori が現れるのは、hachi+dori だけです。

花 hana~bana はな~ばな
酒 sake~zake さけ~ざけ

8

平仮名で書きますと、連濁の音韻交替は hana~bana や sake~zake のように、全て濁点だけで表示されています。

fune	ふね	kawa+bune	かわ+ぶね
hako	はこ	hashi+bako	はし+ばこ
tama	たま	me+dama	め+だま
kami	かみ	kabe+gami	かべ+がみ
tsuka	つか	ari+zuka	あり+づか
sora	そら	hoshi+zora	ほし+ぞら
chi	ち	hana+ji	はな+ぢ
shika	しか	ko+jika	こ+じか

9

こういう具合です。

▶ 「連濁」の最古の出典
19世紀前半
『荘内方言音攷』(庄内方言の記述)
氏家 龍溪(剛太夫) 著 (1775~1834)

▶ 辞書見出し語の出現
1925年『広辞林』

▶ 国語学での定着
1950年代

10

「連濁」という言い方はあくまでも専門用語で、日常会話では使われていません。その現象を指すには、「濁り」という曖昧な言い方が普通だと思います。「連濁」の最初の出典は19世紀の前半でした。

しかし、初めて国語辞典の見出し語として出現したのは、1925年の『広辞林』です。

国語学の専門用語としてようやく定着したのは、1950年代です。それまでは、「いわゆる連濁」とか、そのような言い方が普通でした。

▶ Benjamin Smith Lyman
ベンジャミン・スミス・ライマン
(1835~1920)

▶ 1894: "The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds"
日本語の複合語における無声音が有声音に変わる現象

11

ベンジャミン・スミス・ライマンは1894年に出版した論文で言語学の世界で有名になっています。

論文の題名はこのスライドに書いてある通りです。この Surd と Sonant という馴染みのない英語は昔の専門用語です。Surd とは無声音、Sonant とは有声音という意味です。

▶ ライマンの法則 (Lyman's Law)
形態素の中間に有声阻害音 (濁音) があれば、その形態素が連濁しない。


12

ライマンはこの論文の中で Lyman's Law (ライマンの法則) を述べています。ライマンの法則とは、形態素の中間に有声阻害音があれば、その形態素が連濁しないという制限です。

青鮫 ao+same → ao+zame

青鷺 ao+sagi → ao+sagi

↑
有声阻害音




13

例えば、「青鮫」の場合は、/ao/ と /same/ が複合して /ao+zame/ になりますが・・・

「青鷺」の場合は、後部要素の sagi は zagi にはなりません。

この sagi という形態素に含まれている有声阻害音の /g/ が連濁を防ぐということです。

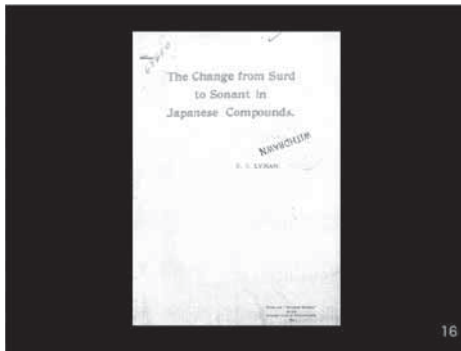


B. S. Lyman
(1902年の写真)

14

しかし、ライマンは言語学じゃなくて、地質学と鉱山学の専門家でしたので、実はこの法則を自分で発見したかどうかは疑問です。今日の発表の主な目的は、この謎の解明です。

本研究の背景



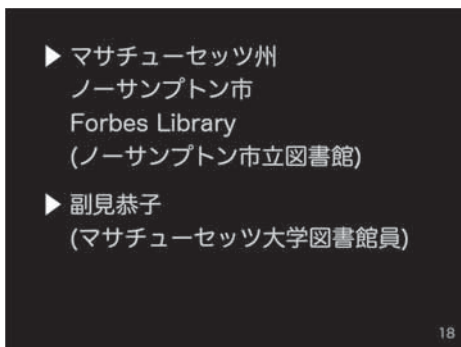
ライマンの1894年の論文を初めて見たのは今から9年ぐらい前です。大学院生の時、探しましたが、結局諦めました。でも、ここ20年、図書館相互貸借制度がどんどん進歩しましたので、9年前に注文してみようかと思いました。

見つかる見込みはまずないと思っていましたが、数週間後にオハイオ州のクリーブランド市立図書館からライマンの論文のコピーが届きました。

憧れの論文がやっと手に入ったのが刺激になって、ライマンについての本格的な研究を始めました。



インターネットでライマンを調べてみたら、マサチューセッツ大学の図書館の記録保管所にライマン・コレクションという収集があることがわかりました。



どうしてその大学図書館にあるかという、一人の図書館・員のヒーローがいたからです。

1922年に、ライマンのいところがライマンの書籍や書類をマサチューセッツ州、ノースampton市の市立図書館に寄付しました。

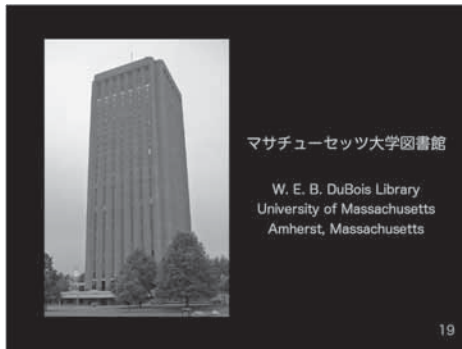
その図書館の空き部屋に置かれて、ずっと無視されていたらしいです。

幸いな事に、1970年代の後半にマサチューセッツ大学図書館に勤めていた副見恭子[ふくみやすこ]さんがそのことを耳にしました。

大学図書館がライマンの書籍を購入したのは1980年で、その他の物は1987年でした。

そして、副見さんは1年ぐらいかけて、日本で寄付金募集に努力しました。

そのお蔭で、ライマン・コレクションの貴重品がきちんと保存されるようになりました。私は2007年の夏にアジア研究学会の補助を受けて、その収集品を見に行きました。書籍、手紙、写真など、色々あります。



これはマサチューセッツ大学の図書館の外見です。ご覧の通り、高層ビルになっています。ゆとりのあるキャンパスのど真ん中にわざわざこんなビルを建てる理由は何だったのでしょうか。建設費を減らすためか、安物のエレベーターを備え付けたんですが、乗るたびにこれで最後かなと思うぐらい怖いものです。やはり、小さい大学町のアマーストにはどうしてもふさわしくありません。2番目に高い建物は4～5階建てです。まあ、建物はともかくとして、図書館の皆様にご世話になって、楽しい一週間を過ごせました。



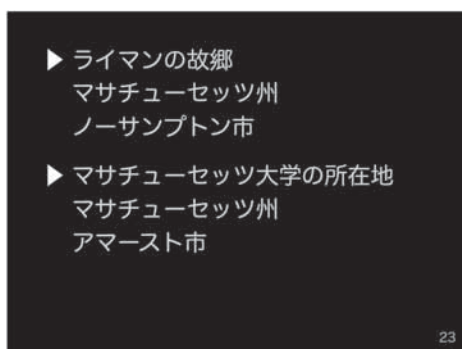
特に、記録保管所、上位補佐の Mike Milewski さん…



そして東アジア部長の Sharon Domier さんに感謝致します。

ライマン伝

次に、ライマンの長い人生を、大まかにご紹介します。



ライマンは1835年にマサチューセッツ州ノーサンプトン市で生まれて、名家の出でした。先祖がその地域に移住したのは1654年です。これはヨーロッパ系移民の定住の初期でした。大学町のアマーストは、ノーサンプトンから近いです。



アマーストとノースハンプトンという町をご存じない方は多いと思いますが、ボストンから車で2時間ぐらいの所にあります。

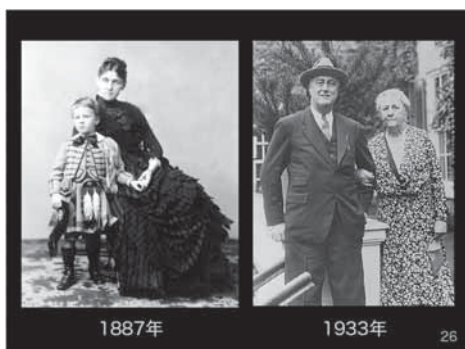
ライマンの父親は裁判官でした。



Sophia Smith (1860年代後半)

25

ノースハンプトンにある名門女子大学のスミス大学は、ライマンのいとこに当たる Sophia Smith の遺産で創立されました。



1887年

1933年

28

フランクリン・ルーズベルト大統領の母親はライマンの又いここでした。

大統領の母方の祖母の結婚前の名字は Lyman でした。



ハーバード大学

27

ライマンは 1855 年にハーバード大学を卒業しました。

その当時は学業成績証明書がなかったので、ライマンが取った科目の記録はありませんが、当時の学生案内書を読むと、ほとんど必須科目だったことは間違いありません。

その必須科目の中には、数学期にわたるラテン語とギリシャ語はもちろん、1学期だけのフランス語も含まれていました。

少ない選択科目には、3年目の鉱物学や4年目の地質学もあって、ドイツ語、スペイン語、イタリア語もありましたが、ライマンがどれを選んだかは分かりません。

卒業した後で、ライマンはしばらく私立高校の先生をしていましたが、そういう仕事には向いていなかったらしいです。

▶ 1856年のアルバイト
ペンシルバニア州の地質調査

28

1856年の夏にペンシルバニア州の地質調査のアルバイトが見つかりました。



J. Peter Lesley

29

調査長は、ライマンのおじでした。

この J. Peter Lesley という有名な地質学者でした。

その次の年の夏にライマンは教師の口を完全に辞めて、それから2年半アメリカのあちこちで地質関係の仕事の続けました。

▶ 留学 (1859~62年)
École Nationale Supérieure des
Mines de Paris
フランス
Bergakademie Freiberg
ザクセン (現代ドイツの一部)

30

働きながら、地質学と鉱山学を自分で勉強したでしょうが、1859年から62年までフランスとザクセンに留学して、ちゃんと鉱山技師の資格を取りました。



31

帰国してからは、フィラデルフィアに引っ越して、自営の鉱山測量事務所を開いて、アメリカとカナダで数年間活躍していました。

- ▶ 1869年
インド (主にパンジャブ地方)
- ▶ 1873年
「御雇外国人」として来日
(開拓使の申し出)
- ▶ 蝦夷の地質調査監督

32

次には、1869年に英国政府の依頼によってインドに渡って、主にパンジャブ地方で1年以上、油田調査を行ないました。

インドからの帰りの途中で、中国と日本のいくつかの港町に寄って、日本が特に気に入ったらしいです。

そして、1873年に開拓使の申し出を受けて、「御雇外国人」として来日しました。

蝦夷の地質調査を監督しながら、日本人の弟子を何人か育成しました。



この写真に写った家は、東京の麴町、平川町にあったライマンの自宅です。



これは、ライマン宛の手紙です。ライマン・コレクションの一点です。

- ▶ 1878年
麴町区が設けられた。
- ▶ 1947年
麴町区と神田区が合併し、千代田区になった。
- ▶ ライマンの「平川町」
=現在の「平河町」

35

1878年にその地域は麴町区になりました。

1947年に麴町区が神田区と合併して、千代田区になりました。

「かわ」の漢字が変わりましたが、ライマンの「平川町」は現在の「平河町」と同じ地域です。



1976年に私が初めて日本に来たとき、今横浜にあるスタンフォード・センターという日本語学校は、平河町のすぐ隣の紀尾井町にありました。

日本農業研究所のビルにありました。

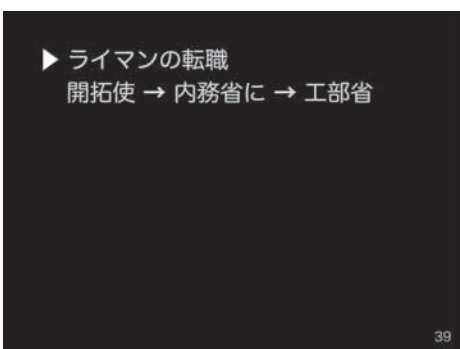


その農研ビルです。



そのスタンフォード・センターに9ヶ月通っていましたが、日本に着いたばかりのとき、下宿を探している間、この都市センターホテルに2～3泊泊まりました。

振り返ってみると、本当に妙な感じでした。ライマンと何か不思議な縁があるようですね。



ライマンは、北海道の調査が終わってから、まず内務省に、そして次に工部省に転職して、石炭や石油を捜すために日本全国を回りました。

1879年に最後の契約が切れた後は、自費で東京に残って、調査関係の地図や報告書を仕上げました。

8年間の日本滞在で、ライマンは日本語がかなり上手になったらしいです。

ライマン・コレクションに含まれている日本語教科書を見ると、すぐ目につくのはライマンの手書きの訂正です。

ローマ字で印刷された単語表や例文に数多くの誤りがあったんです。

▶ 1879年『朝夜新聞』

工部省お雇の来曼氏は日本文も書けちつとも日本人と變わらなかつたが、先生にたゞ一つ困ることは「きのふはわちきがおまはんの方へ参る筈でありましたが」などと言ふことだ…

40

それに、1879年に東京の『朝夜新聞』にライマンについての記事が出ました。

ライマンのこの日本語のどこがおかしいか言うと、やはり人称代名詞の「わちき」と「おまはん」が目立ちます。

▶ 『日本国語大辞典』

「わちき」の項目

(「わたくし」から変化したもの)

自称。江戸の芸娼妓の用いた語。町家の娘が用いることもある。

41

『日本国語大辞典』の「わちき」の項目はご覧の通りです。

▶ 『日本国語大辞典』

「おまはん」の項目

(「おまえさん(御前様)」の変化した語)

対称。江戸時代、おもに遊里ことばとして、芸妓や女郎が客に対して用いた。おもに大坂で用いたが、江戸でも芸妓が一部用いた。

42

そして「おまはん」の説明はこのようになっています。

▶ 1880年 12月

ライマンは日本を去った。

▶ 故郷のノーサンプトンに帰った。

▶ 1887年

フィラデルフィアに戻った。

43

1880年の12月にライマンは日本を去りました。

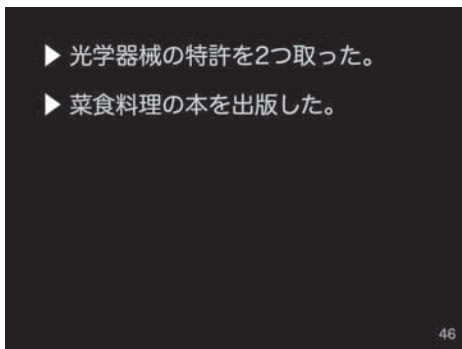
故郷のノーサンプトンに帰って、数年間市議会などで活躍していましたが、1887年にフィラデルフィアに戻って、それからずっとそこに住んでいました。



帰国直後に住んでいたノースハンプトンの家は部分的に改造されて、スミス大学の寮になりました。

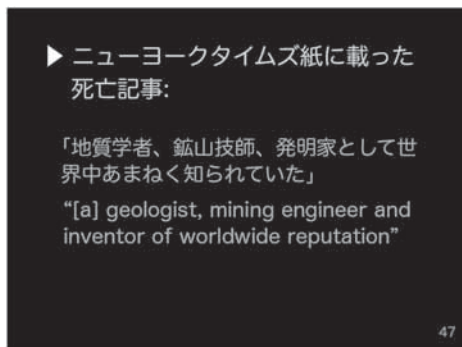


1907年にライマンは世界一周の船旅をして、もう1度来日しました。
その時に、昔の弟子に再会しました。



ライマンは相当な博識家でした。
光学器械の特許を2つ取りました。

1864年に菜食主義者になりましたが、1917年に(81歳で)菜食料理の本を出版しました。
言語学にも興味があったことは意外ではありません。



1920年8月31日付けのニューヨークタイムズ紙に載った死亡記事によると、ライマンはこういう人物でした。

ライマンの日本語研究



ライマン・コレクションには、1894年の有名な論文の他に、“Notes on Japanese Grammar”という題名の論文もあります。

表紙付きの小冊子の形になっていますが、最初は横浜で発行されていた英字新聞の Japan Weekly Mail に 1878年に連載されたものです。

題名にもかかわらず、文法じゃなくて、発音に関する論文です。

当時の音声学の水準を考えれば、ライマンの解説にはかなり進んだ所もあります。(アクセントの説明はめちゃくちゃですが…)

▶ 東北方言の特徴

In the north *e* becomes apparently the French *é* as in *bonté*. The *i* there (and perhaps elsewhere) seems to become the corresponding short sound, the French *e* in *cet* or the English *y* in *city*...

北方では、[東京の] *e* [に対応する母音]がフランス語の *bonté* の *é* に似た音になる。そして(おそらく他の地域においても) [東京の] *i* [に対応する母音]が仏語の *cet* の *e* や英語の *city* の *y* のような短音になるらしい。

50

東北方言の特徴も指摘しました。

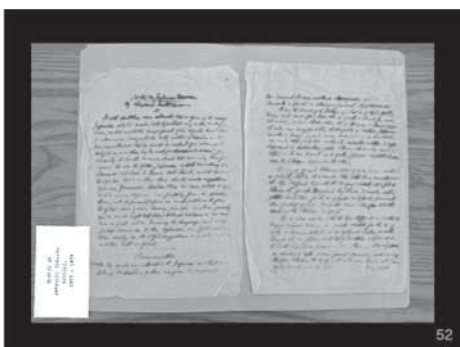
英語の引用文と日本語訳です。

ライマンの母音の記述は正確だとは言えませんが、エ段の母音が [i] に近いという印象は、現代東北方言の1つの特徴です。

そして、現代東北方言のイ段の母音が [i] と [ɯ] の間のいわゆる「中舌母音」になっていることは広く知られています。

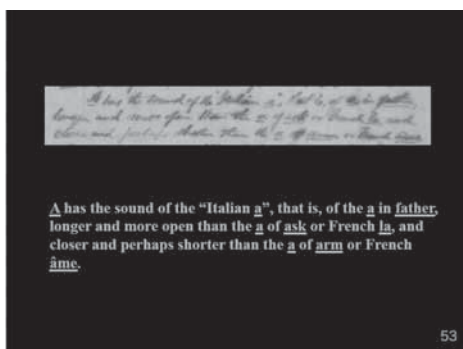


この地図は、NHKの発音・アクセント辞典に載っているものです。



ライマン・コレクションには、出来上がった冊子だけじゃなくて、前半の手書き原稿もあります。

ライマン・コレクションに保存された手紙と同じように、この原稿は万年筆で書かれたもので、インクの色があせているし、紙の質も大分落ちています。



何と書いてあるでしょうか。

万年筆で書くと、カーボン紙も役に立たないので、19世紀の後半には、ライマンのような人は、手紙を2部ずつ書いて、その1部を取って置く習慣があったらしいです。

それでライマンへの手紙だけじゃなくて、ライマンからの手紙も何通もライマン・コレクションに保存されています。

これらの手紙には、貴重な情報が含まれているかもしれませんが、読むのは容易な仕事ではありません。私には、その責任を担う資格も余裕もありません。



1894年の有名な論文はアメリカ東洋学会の1883年の例会で発表したものに基づいているそうです。

その発表の題名は "The Japanese Nigori of Composition" でした。

先ほど申しましたように、「連濁」という専門用語は、当時はまだ使われていなかったんです。

1894年に論文を発行したのは Oriental Club of Philadelphia (フィラデルフィア東洋会)。

ライマンはその会の設立会員でした。



1910年に、小倉進平がライマンの1894年の論文の評論を頼まれて、『国学院雑誌』に出版しました。

小倉はその後で、朝鮮語に関する研究で有名になりましたが、この優れた批評は連濁研究に見逃せない貢献でした。

ライマンの “データベース”


データベースという言い方は時代錯誤ですが…

- ▶ ヘボン
James Curtis Hepburn
(1813~1911)
- ▶ 1872年『和英語林集成』第2版

57

ライマンの1894年の論文は半分以上がいくつかの一覧表に占められています。例として挙げた単語の一覧表です。

その単語はほとんどヘボンが編纂した『和英語林集成』の1872年の第2版に載っている見出し語です。



James Curtis
Hepburn

58

しかし、ライマンはその単語の漢字・仮名綴りも定義も省いて、ローマ字しか提供しませんでした。言うまでもなく、ローマ字だけで確定できないこともあります。

現代日本語で使われていない単語が多いことに特に注意しなければなりません。

おまけに、ライマンの論文に誤植も少なくないです。従って、ライマンのローマ字が何を指すかを確かめるにはヘボンの第2版が不可欠です。

- ▶ 1867年『和英語林集成』第1版
- ▶ 1872年 第2版
- ▶ 1886年 第3版

59

1867年の初版と1886年の第3版と違って、第2版は部数が少なく、なかなか手に入りません。



http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index2_j.html

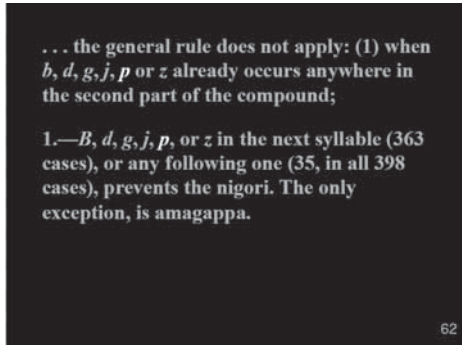
60

幸いに、明治学院大学の図書館のウェブサイトでアクセスできるようになっています。

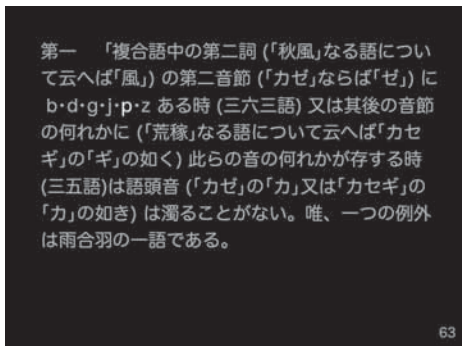
ヘボンは明治学院大学の創立者の1人でした。

ライマンの(諸) 法則

さて、ライマンは 1894 年の論文で“ライマンの法則”をどれほど厳密に述べたのでしょうか。

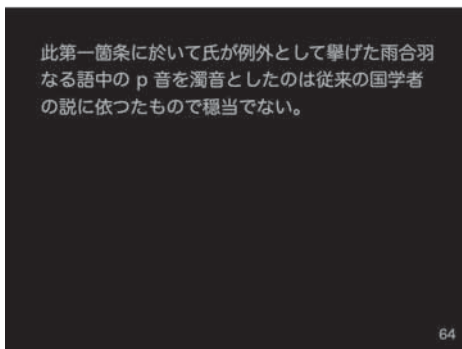


こう書いてあります。



これは小倉晋平の翻訳です。括弧に入っている説明は小倉が付け加えたものです。

連濁を防ぐ子音の中に *p* が含まれていることが興味深いです。



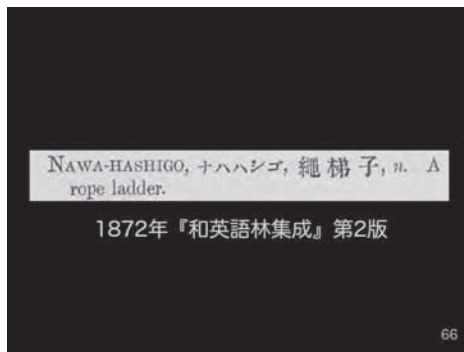
小倉はこの説明を提供しています。

要するに、ライマンは半濁音でも濁音の一種と思い込んでいたんです。



現代日本語においては、*nawa+bashigo* や人名の *ken+zaburō* のような本当の例外はありますが、非常に少ないです。

ご覧のように、*hashigo* にも *saburō* にも、黄色い文字によって表示された有声阻害音（つまり、濁音の子音）が入っています。



しかし、ヘボンの第2版に載っているのは、連濁無しの「NAWA-HASHIGO」です。

人名はもちろん載っていません。

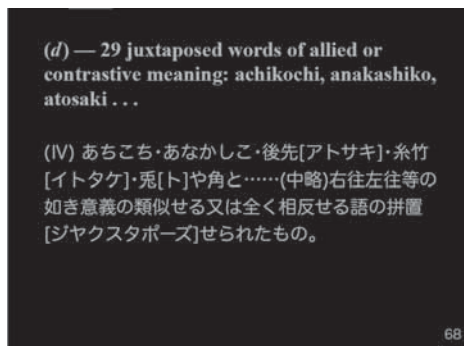
この nawa+hashigo という発音は怪しいですが、先ほど解決した /p/ の例を除いて、ライマンのデータベースに法則の例外はありませんでした。



面白いことに、ライマンはこのライマンの法則だけじゃなくて、他にも連濁に関する制約をいくつか提案しました。私がマサチューセッツ大学の言語学科での発表で、このことを述べたときに、川原繁人さんは、こういう反応をしました：

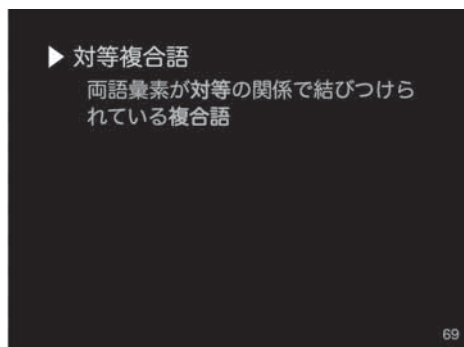
「なんで Lyman's Laws (複数形) って言わないのかな」

今日はその他の制約を1つだけ取り上げます。



連濁しない単語については、ライマンはこのように書きました。

日本語訳はまた小倉の論文からです。

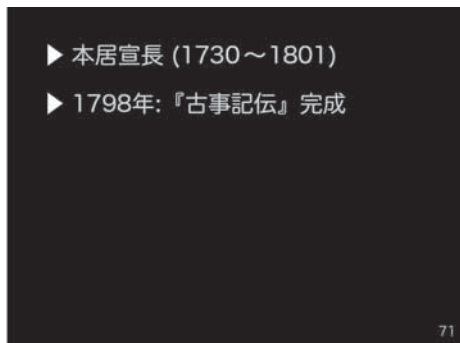


「後先」のような単語は現代言語学で対等複合語と呼ばれていますが、ライマンが説明した通り、ほとんど連濁しません。

小倉は、ライマンの挙げた例について様々な問題点を指摘しましたが、対等複合語が連濁しないという主張には異論はありませんでした。

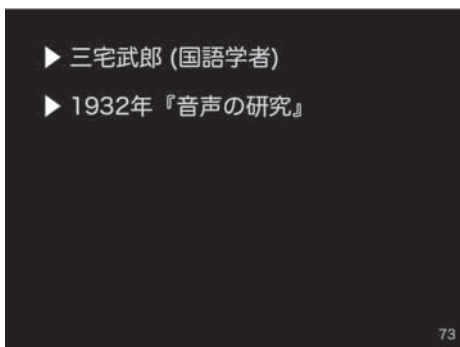
ライマンの法則の発見者は？

ライマンが本当に自分独りでライマンの法則を発見したかどうか疑っている言語学者は少なくないと思います。



国語学の歴史を知っている人が特に疑いがちです。

国学者の本居宣長が 1798 年に書き終わった『古事記伝』にライマンの法則に当たる一節があります。



その一節を公表したのは、国語学者の三宅武郎です。

三宅の論文は 1932 年に、日本音声学会の機関誌、『音声の研究』に載りました。

ツブキノタロシ
凡て連便によりて、下ノ言の頭を濁るは、常多
けれども、其ノ言に濁音あれば、其ノ頭は必濁ら
ざる例なり。

『古事記伝(一)』本居宣長 撰 倉野憲司 校訂
岩波書店, 1940年, 203頁.

74

三宅の引用した一節はこれです。

ライマンが日本で買った本の中に『古事記伝』もあります。しかし、マサチューセッツ大学図書館の東アジア部長の Domier さんによると、日本語の教科書と違って、ライマンの『古事記伝』には書き込みはありません。

言うまでもなく、ライマンは『古事記伝』のようなものを読む能力があったとは考えられません。

しかも、能力が仮にあったとしても、その巨大な書物に埋もれた、関連のある一節を見つけられた可能性は低いです。小倉は上代語の連濁に興味を持って、1910年の評論に『古事記』に出てくる単語をたくさん挙げました。

それらの単語を『古事記伝』から拾ったと書いてあるので、小倉は、ライマンと違って、ある程度『古事記伝』を読む能力がありました。

それなのに、本居宣長がライマンに先立ってその法則を記述したという旨の申し立ては小倉の評論に一切ありません。

それを知っていたら、積極的に評論で報告したに違いないです。

ということは、ライマンが法則を盗用したという疑いがあるのも無理はないですが、結局盗用する手はなかったようです。

簡単に申しますと、本居もライマンも独自に同じ法則を発見したと結論づけることができます。

そうすると、ライマンの法則の発見をどう説明すればいいでしょうか。

まず第一に、ライマンは熱心な日本語学習者でした。連濁は学習者の好奇心をそそる現象なので、ライマンは当然連濁に気が付いて、不思議に思ったでしょう。

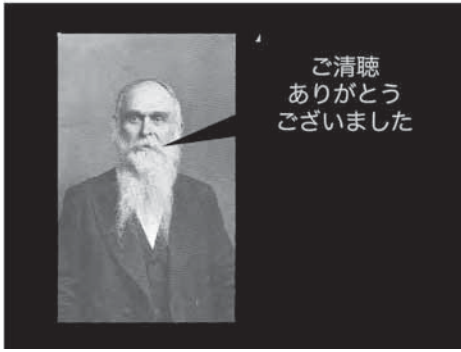
第二に、ヘボンの和英辞典が運良く利用できました。この新しく出た辞書は、ライマンの連濁研究に絶対必要な資料になりました。

第三に、ライマンは並外れの知力と根気がありました。

こういう才能がなかったら、適切な資料が手元にあっても、徹底的に調べることはできませんでした。

- ▶ 熱心な日本語学習者であった。
- ▶ ヘボンの和英辞典が利用できた。
- ▶ 並外れた知力と根気があった。

75



本日の発表は以上です。

くどくて、取り留めの無い話でしたが、ご清聴ありがとうございました。